

「インマヌエル」の預言の最終的成就とキリストの神性

恐らく多くの方が聞き覚えのあると思える、有名な「インマヌエル」ですが、実際は謎が多く、難解な預言のひとつのされています。この語はイザヤ書に二度登場し、マタイが引用して、マリヤからイエスが誕生した時、この預言が成就した（マタイ 1:22-23）と明確に記していますので、「インマヌエル」はイエス・キリストを指し示す預言であることに間違いありません。

イザヤ書の「インマヌエル」の記述の背景を簡単に述べますと、ユダの王アハズの時代に、シリアと北イスラエルが連合して攻めて来ることを聞き、恐れます。

しかし、それは起こらないと、神はアハズに告げ、その事の確証として神からの「しるし」を求めようように告げますが、アハズは神を信頼せず、求めようとしません。

それで、神自ら「しるし」をお与えになります。それが「インマヌエル」の誕生です。

「それゆえ、わたしの主が御自ら、あなたたちにしるしを与えられる。見よ、おとめが身ごもって、男の子を産み、その名をインマヌエルと呼ぶ。」

「災いを退け、幸いを選ぶことを知るようになるまで、彼は凝乳と蜂蜜を食べ物とする。

その子が災いを退け、幸いを選ぶことを知る前に、あなたの恐れる二人の王の領土は必ず捨てられる。」（イザヤ7：14－16）（新共同訳）

インマヌエル 

イザヤ 7:14 (右から左に読みます)

「凝乳と蜂蜜」はおそらく、離乳食のことでしょう。それでまだ物心が付く前に、つまりわずか二、三年のうちに、シリアと北イスラエルの王は捨てられるという預言です。

事実、イザヤがこの預言を行なった二年後、紀元前 732 年にアッシリヤがダマスコを攻略し、シリアの人々を強制移住させました。そして、紀元前 722 年にサマリヤが陥落し、北イスラエルも滅びました。

アハズは、イザヤから二つの国が倒れるという預言を与えられていたのに、神を信頼しないでアッシリヤに助けを求めました。（列王記第二 16 章 7-9 節 参照）

結果として、シリアと北イスラエルは倒されましたが、今度はそのアッシリヤがユダを苦しめることとなります。

「主は、あなたとあなたの民と父祖の家の上に、エフライムがユダから分かれて以来、臨んだことのないような日々を臨ませる。アッシリアの王がそれだ。」（イザヤ 7:17）

「それゆえ、見よ、主は大河の激流を彼らの上に襲いかからせようとしておられる。すなわち、アッシリアの王とそのすべての栄光を。激流はどの川床も満たし至るところで堤防を越え、ユダにみなぎり、首に達し、溢れ、押し流す。その広げた翼はインマヌエルよ、あなたの国土を覆い尽くす。」（イザヤ 8:7,8）

この翻訳は分かりにくく、ちょっと読むと「インマヌエルの国土を覆う」という風にとれてしまいますが、この「あなたの国土」アハズの国、ユダ王国のことです。

インマヌエル

וְחַלְף בְּיְהוּדָה שֶׁטָף וְעָבַר עַד- צְוָאר יָגִיעַ וְהָיָה מְטוֹת כְּנַפָּיו מְלֵא רֶחֶב- אֲרָצָה עִמָּנוּ אֵל

イザヤ 8:8 (右から左に読みます)

この「インマヌエル」は原語では文の一番最後に付け加えられています。ジェームズ王欽定約（英語）では、最後に [O Immanuel ___]（ああ、インマヌエル！）と付け加えており、ここは「インマヌエル」と音訳する所ではなく、2節あとに出て来る次のように、文として訳すべき所なのかもしれません。

「企てを考え出せ。それは破られる！ 言葉を出せ。それは立たない。神がわたしたちと共におられるからだ！」（イザヤ 8:10）

インマヌエル

לָכֵן יִתֵּן אֲדֹנָי הוּא לָכֵם אֹת הַנְּהָה הָעֹלָמָה הָרָה וְיִלְדַת בֵּן וְקָרְאת שְׁמוֹ עִמָּנוּ אֵל

イザヤ 8:10 (右から左に読みます)

この句の後半の部分の原語は、やはり「インマヌエル」で、最後に付け加えられています。しかし、なぜか、ここはほとんど、どの訳でも文として各国語に翻訳されています。

ですから、この8節は「・・激流はどの川床も満たし至るところで堤防を越え、ユダにみなぎり、首に達し、溢れ、押し流す。その広げた翼はあなたの国土を覆い尽くす。おお、しかし神がわたしたちと共におられる」と言うニュアンスで語られているに違いありません。

実際、アッシリヤの国の地図を見れば、アッシリヤの国がメソポタミアの地域からエジプトまで洪水が流れてきたように広がっている様子を見ることができますが、孤島のように小さく丸く、残っている場所があります。そこがエルサレムです。ですから、ここで「その広げた翼があなたの国土を覆い尽くす」しているのがわかります。

「インマヌエル」の記述はこれだけです。その後、そのような子供の誕生があったのかさえ分かりません。



一般にイザヤ7章の「インマヌエル」についての記述は、理解の難解な部分の一つとされています。それで、私なりに、考察してみました。

マタイのイエスに適用された預言だという記述がなければ、一見普通の、当時の出来事について記しただけの記述のように思えますが、前後の文脈を注意深く読むと、「特別な預言」が埋め込まれている部分として、単なる、物語の登場人物の1人としてではないことを暗に示すための意図的な構成になっていることが読み取れます。こう考える理由は次の点です。

イザヤはこれらの言葉をずっと、アハズに対して語りかけていたのが、インマヌエルに言及するこの部分だけ、「ダビデの家」に対する語りかけに変わっています。

また、呼び方も、記述の前後は「あなた」（単数）とアハズ個人に対して語っているのに対し、この13節と14節だけ、「あなたがた」とダビデの家全体に対して語っています。

ですから「インマヌエル」は単に不信仰なアハズに対してではなく、「ダビデの家」に対する「しるし」であるということです。

「ダビデの家」という表現の意味するところは、ダビデの家から神の家を建て、それをとこしえに保つという、いわゆる「王国契約」です。

「あなたが生涯を終え、先祖のもとに行くとき、あなたの子孫、あなたの子の一人に跡を継がせ、その王国を揺るぎないものとする。

この者がわたしのために家を建て、わたしは彼の王座をとこしえに堅く据える。

わたしは彼の父となり、彼はわたしの子となる。わたしはあなたに先立つ者から取り去ったように、彼から慈しみを取り去りはしない。

わたしは彼をとこしえにわたしの家とわたしの王国の中に立てる。彼の王座はとこしえに堅く据えられる。」（1歴代 17:11-14）

「インマヌエル」が「ダビデの家」に対する「しるし」となるということは、彼こそが、その契約を履行するダビデの子孫であり神の王国の王となる者だということを示唆しているのかもしれませんが。

さて改めて「おとめが身ごもって、男の子を産み、その名をインマヌエルと呼ぶ。」という部分についての考察ですが、「インマヌエル」と呼ばれる子が誕生するという約束はありますが、すでに触れたように、実際にそう呼ばれた人物は、聖書全巻のどこにも出てきません。

14節で「おとめ」と訳されているヘスライ語（アルマー）は、若い女、処女 という意味で、イザヤ書自体では、「処女」と断定できません。たとえば「新妻」であったとしても構わなかったはずですが。

ともかく、イザヤの時代、何らかの印象的な誕生をした子がいたと、考えられますが、聖書が、それについては何ら語っていないのは次に挙げる幾つかの理由が考えられます。

まず、「インマヌエル」は神を信頼する「しるし」として与えられたのに、それさえ無視したアハズに対して、「神が共にいる」という保証が無意味になった。

基本的に将来の完全な救いの手だてとしての預言であるため、そこに焦点を当てるために、あえて、当時の出来事の記録を省いた。などが考えられます。

イエスも、生まれる前に「イエス」と名付けるようにと言われ、「インマヌエル」と呼ばれたことはありません。

それで、「インマヌエル」は称号、あるいはスローガンのように使われています。

イエスが誕生するまでは、当時のユダヤ人にとっては、「神の確約」の故に存在する架空の人物（イ

メージとしては「メシア」と同義語のような「インマヌエルの役割を果たす、来るべき方」という受け止め方)であったのかもしれませんが。

もし「インマヌエル」の意味が、仮に、複数ではなく「神がわたし（単数）と共におられる」という意味であるなら、「わたし」はその当人、つまりインマヌエル自身を指すと言えます。

それはつまり、「インマヌエルなる人と、常に神が共におられる」ということになります。

しかし「インマヌエル」の意味が「神がわたしたちと共におられる」ということなので、「わたしたち」とは厳密にはユダヤ人のことで、つまり人間のことです。

となると、インマヌエル自身は、人から生まれる「子」なので、「人間」ですが、しかし「わたしたち」の中に含まれるとは考えにくいと思えます。

「インマヌエル」が誕生したことによって、「安全に守られる、敵におののく必要はない」というのですから、「インマヌエル」自身は「敵の攻撃におののいたり、守られる必要のある側の「わたしたち」」に含まれてない考えるのが自然です。

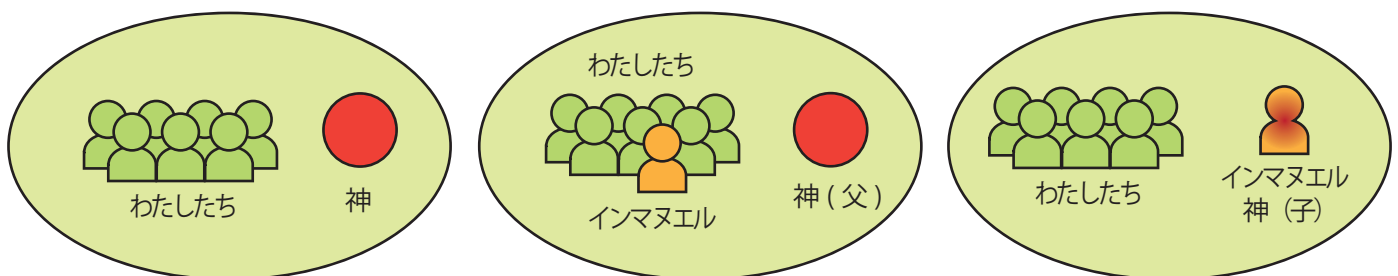
また、「共にいる」という表現ですが、もし、霊的あるいは比喩的な意味で共におられる、つまり神が天から常に暖かく見守って下さると言う意味であるなら、地上に「インマヌエル」なる人物が誕生する必要などは初めからないと言えます。

「インマヌエル」が実際に人々の中に存在するようになったゆえに、「神が共におられる」といえる状況になったわけですから、やはり神は文字通りの意味で共におられるという意味であると捉えるべきであると言わねばなりません。

そうなると必然的に、「インマヌエル」が「私たち」と共にいてくれることそのものが「私たちと共に神がおられる」という状態だと結論するのがもっとも文脈にそった正しい理解と言えます。

すなわち「インマヌエル」は「おとめから生まれた人の子」でありながら「人と共にいる神」とあるということになります。

これらは、「新約聖書」中の、キリストの神聖に関する記述と合致します。



「インマヌエル」が誕生する必要性がない

「インマヌエル」が保護される側と同類と考えることはできない

「インマヌエル」こそ共におられる「神」にほかならない

では次に「インマヌエル」の預言はどのように完成するのかを考察してみたいと思います。

といっても「インマヌエル」の行動、役割については何も具体的な預言はないので、関連した預言からそれらを推察してみることにします。

まず、インマヌエルがキリスト・イエスを指し示していたということは、メシアの預言と直結すると言えます。主な違いは、メシアは「油注がれた者」なので、バプテスマを受けられた時から成就

しますが、「インマヌエル」はその誕生時から成就します。

では、最初にメシアの到来についての預言、ダニエル書 9 章の 70 週の預言と比較してみましょう。

「お前の民と聖なる都に対して、七十週が定められている。それが過ぎると逆らいは終わり、罪は封じられ、不義は償われる。とこしえの正義が到来し、幻と預言は封じられ、最も聖なる者に油が注がれる。

これを知り、目覚めよ。エルサレム復興と再建についての御言葉が出されてから油注がれた君の到来まで七週あり、また、六十二週あつて危機のうちに広場と堀は再建される。

その六十二週のあと油注がれた者は不当に断たれ都と聖所は次に来る指導者の民によって荒らされる。その終わりには洪水があり終わりまで戦いが続き荒廃は避けられない。

彼は一週の間、多くの者と同盟を固め半週でいけにえと献げ物を廃止する。憎むべきものの翼の上に荒廃をもたらすものが座す。そしてついに、定められた破滅が荒廃の上に注がれる。」(ダニエル 9:24-27)

70 週が満了すると「逆らいは「終わり、罪は封じられ、不義は償われる。とこしえの正義が到来し、幻と預言は封じられ」ることが成し遂げられます。

違反、反逆はもはや見られず、罪は封じ込められ、過去のものとなり、不義の代償はすでに支払いを済ませ、永遠にわたる正義が始まっています。

当然のことながら、これまでの歴史において、未だこれが成就していないことは誰の目にも明らかです。

さて、このメシアに関連した預言とイザヤ 7,8 章の預言とを比較すると、興味深い、共通語句が目にとまります。それは、「翼」と「洪水」です。

「その終わりには**洪水**があり」「憎むべきものの**翼**の上に荒廃」(ダニエル 9:26,27)

「**激流**はどの川床も満たし至るところで堤防を越え、・・首に達し、溢れ、押し流す。その広げた**翼**は・・あなたの国土を覆い尽くす」(イザヤ 8:7,8)

「荒廃をもたらす者」は終末期にユダヤを攻撃する敵であり、「洪水」はその様子を示しています。

イザヤの方は「アッシリア」の攻撃とその様子です。(すでに地図で示した通りです)

これらの一致点から、「翼」はその広範囲に及ぶ影響力の膨大さのようなものを表しているのかもしれない。

いずれにしても、インマヌエルでもあるメシア、キリストは終末期におけるハルマゲドンの際にご自分の民を保護する「しるし」となり、「共にいる神」としての役割を果たされるといふことなのでしょう。

しかし、メシアの働きはそれで全て終了するわけではありません。

キリストは千年の間王として支配すると記されています。

この時の状況を示しているのが次の預言です。

「終わりの日に主の神殿の山は、山々の頭として堅く立ち、どの峰よりも高くそびえる。国々はこぞって大河のようにそこに向かい、多くの民が来て言う。「主の山に登り、ヤコフの神の家に行こう。主はわたしたちに道を示される。わたしたちはその道を歩もう」と。主の教えはシオンから御言葉はエルサレムから出る。

主は国々の争いを裁き、多くの民を戒められる。彼らは剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣を上げず、もはや戦うことを学ばない。(イザヤ 2:2 - 4)

「神の家の山」は3節から分かるように、シオンを指します。シオンはエルサレムの別名と考えて差し支えない仕方で用いられています。

イザヤの時代のこの預言にある、エルサレムが天の王国を指すと言える聖書的根拠はありません。

実際、諸国民が流れのように天のエルサレムに向かうことはありません。

この預言が成就する「終わりの日」(「末の日」新世界訳)は、諸国民が、エルサレムに上り、ヤコフの神を認め、そこで示される律法を守ろうとするゆえに、そして神ご自身が、問題を裁かれるので、平和を学び、もはや戦争がなくなることを約束しています。

この出来事は、ハルマゲドンで終わる「終わりの日」のことではありません。終末期の諸国民はそれとは正反対の、互いに争い、そして、神とさえ戦うために終結します。従って、ミカ書、その他に出て来る、「末の日」に関する描写は「千年王国」の時に成就する出来事であるという理解で、間違いのないと思います。

新共同訳では「終わりの日」と訳されていますが、「新世界訳は「末の日」と訳しています。

原語のヘ語：「アカーリース」「最終の部分」に「日々」がついていますので、直訳的には、final part of the days (日々の最終部分)と訳されています。

ギリシャ語聖書によく登場するいわゆる「終わりの日」という語句は、英語では一般に「last day」「最後の日(単数)」と訳されています。

この二つのニュアンスの違いは、ヘ語：アカーリースは連綿と続く時代の最終の部分(時代)というイメージなのに対して、ギリシャ語の方は、英語では定冠詞を付けて the last day としているように、その時だけを切り取った、独立した一時として表現されています。

「末の日」である千年期に平和が回復し、その最後に、エルサレム（神の都市）は単なる一国家の名称ではなく、完成されたものとなります。

それが啓示 21 章に預言されている状況です。

「わたしは、新しい天と新しい地を見た。以前の天と以前の地は過ぎ去っており、海はもはやない。また、聖なる都市、新しいエルサレムが、天から、神のもとから下って来るのを、そして自分の夫のために飾った花嫁のように支度を整えたのを見た。それと共に、わたしはみ座から出る大きな声がこう言うのを聞いた。「見よ！ 神の天幕が人と共にあり、神は彼らと共に住み、彼らはその民となるであろう。そして神みずから彼らと共におられるであろう」。(啓示 21:1 - 3)

「新しいエルサレム」は天から地に下ってくるものですから、「新しいエルサレム」が「新しい地」でもあるということになります。

では、この「新しいエルサレム」つまり「花嫁」ですが、この花嫁は夫を天に残して、花嫁だけ、地に下ってくるのでしょうか。

(啓示 22:5)「そして彼らは限りなく永久に王として支配するであろう」とありますので、もしそうだとしたら、夫と花嫁は永遠の別居ということになります。

「自分の夫のために飾った花嫁のように支度を整えたのを見た」とあるので、やはり、花嫁は夫の居る所にやってくるために支度を整えているということであり、キリストと花嫁は、千年王国後、天から地に降りてくるということです。

その結果、「見よ！ 神の天幕が人と共にあり、神は彼らと共に住み、彼らはその民となるであろう。そして神みずから彼らと共におられる」が現実のものとなるということです。

ですから、ここで述べられている人と共に住む「神」とは父なる神ではなく「イエス」であることが分かります。

これが、「インマヌエル」の預言の最終的な成就となる部分です。その時、文字通り「わたしたちと共に神はおられる」(マタイ 1:23) が現実のものとなります。

インマヌエル 

「主はシオンを選び、そこに住むことを定められました。これは永遠にわたしの憩いの地。ここに住むことをわたしは定める。」(詩編 132:13 - 14)